

臺灣及び菲律賓遠征の企圖」に於ては家康が支那貿易の仲介者たらしめんがため、兼ねて又其國も貿易せんがため臺灣視察に有馬晴信を遣したる事及び元和元年村山東菴をして臺灣征伐を圖らしめし事、寛永七年には松倉重政の、同十四年には幕府自らの出宋征伐の計畫ありし事を記す。「濱田彌兵衛」の項には彌兵衛の事業を叙し、天野屋傳説は採るに足らず、天野屋太郎左衛門とは恐らく彌兵衛部下の一人なるべしとせし、鎖國とその得失」に於ては日本の損失なりと云ふ、從來の説に對する内田博士の鎖國によりて得たる利益もありと言ふ所論を參酌して、經濟上、政治上、文化上の三方面より得失を論じ、鎖國は一得一失にして比較計算せば結局損失の方大なるべしとせり、各項參考論文圖書を掲げ又寫真版を挿入す（東亞堂發行、價二、五〇）〔中村〕

●日本歴史圖録 第二輯

本輯に於ては、藤原時代庶民の風俗として大阪四天王寺所藏の扇面古寫經の下繪より、市廛の圖を採りて彩色版とせるを初めとし、以下十五葉の寫真版には、出雲大社に就いては本殿、樓門、拜殿、本殿平面圖、本殿模型等を收め、上古の鏡に就いては、人物畫像鏡、獸帶鏡、六銚鏡、人物畫參鏡、神人畫象鏡、四神四獸鏡等を、藥師寺、金堂藥師三尊に就いては三尊の外臺座の左右側、

背圖等ありて、圖版の採用に注意せるを見るべく其外文、藤原基誌、仲靈、前九年の役、中尊寺、東大寺南大門、後北條氏、南蠻八來朝、大阪陣、支倉常長、江戸時代前期の京都、江戸時代貴族の調度、西兩の役、近古以後通用錢等に關するものありて、夫れ夫れに數種の圖版を按排せるは、既刊の二輯と同じく編者の勞を多とすべきものなり。尙附するに平易なる解説を以てすること前輯と同じ。（歴史參考圖刊行會發行、非賣品〔西田〕）

●最近支那經濟

善生 永助著

本書は支那現時の財政及び經濟狀態に就き解説したるものにして全篇八章より成り財政、借款、銀行及金融、關稅、度、外國貿易、內國商業、製造工業、鑛山業、交通機關等の事實を詳かに記述し菊版五百五十餘頁凡て平易の文章を用ひ支那經濟財政の概念を得るに恰好の書なり（丁未出版社、價二、五〇）

●毀處卜辭中所見先公先王考

王國 維著

冀日河南省の殷墟より出土せし龜版獸骨文字の研究が其後益々進歩し學界を裨益しつつある所なるが本書の研究は内藤博士の發表せられたる「王多」を讀みて更に著者の試みたる新研究にして今其主要なる点を列擧すれば、卜辭中に貞熒于父とある父は史記宗隱帝王世紀 山海經等に見ゆる父にして即殷の始祖たる帝嚳たる、

と。卜辭中にある土は相土にして契の子昭明の子たること。楚辭  
天門の該乘秉德 恒秉季徳の該は王亥にして季 卽ち冥の子たる  
こと。殷墟書契後編に王亥に關する卜辭七事ありて之が殷の先王  
先公たること疑無きこと。王亥の外に卜辭中見ゆる所の王恒は鐵  
雲戔龜及び書契後編等にも散見し之に聯關して汲冢 狄易の古代  
に於て同音を有し、商の祖先冥、河を治め、王亥殷に遷り次で商  
邱に據り有易高燥の地に游牧せしが有易の人遂に王亥を殺せし  
こと。従つて楚辭天問の昏微循跡有狄不寧とある微の上甲微たるこ  
と、湯以前に在りて殷室を復興せし人として殷人の特に尊敬せし  
上甲の名は未だ殷墟書契中には發見せられざりしが今偶然卜辭  
中より之を發見せしこと。等にして其他報丁、報丙、報乙、主壬  
主癸、大乙、唐、羊甲、等を論証し唐は湯、羊甲は陽甲ならむと  
推し、史に出でたる帝王の名にして卜辭に見ゆる者、並に卜辭  
に見ゆる父甲、兄乙等の人名にして史に見ゆる所の者を擧げ、  
卜辭に在りて史に無き所は皆諸帝の異名及び其の兄弟の未だ立た  
ずして殞せる者なることを論斷し商の繼統法の弟に及ばずを主と  
し子に繼ぐを補助とせしことを論説せり。「藝文」第八年第八號  
所載の内藤博士の「續王亥」は此王國維氏の研究を批評的に紹介せ  
られたるものにして相参照すべきものなり。「那波」

● 世界に於ける希臘文明の潮流 文學博士 坂口 昶著

希臘文明に關する論著本邦に多しと雖も、アレキサンドル大王  
以後に於ける該文明の世界的弘運の威力、古今に亘りて貫通せる  
その潮流を包容して歴史的に尋究闡明せるものあらず。本書は著  
者がかの徒に希臘文明の嘆美鼓吹に陷るを却け、世界史の地に  
立ちて公平普遍なるこの文明主潮の影響價值を論述せるもの  
に、唯、學界に於ける一部の欠陥を補ふべき述作たるべし。今篇八  
章より成り、これに序論並に結論を附せり。先づ序論に希臘史の各  
時期を通觀して、アレキサンドル大王以後の世界的個人的なる現  
代的文明即ちヘレニズムに及び、第一章に古典的文明時代の都市  
國家を説き、第二章にアレキサンドル大王の東征を論じてヘレニ  
ズム時代に入り、第三章に該時代初期の雅典の位置を觀察し、第四  
章に希臘文明の東方傳播即ち小亞、埃及、シリア及印度中亞方面  
に及ぼしたる勢力影響を述べ、殊に當代ヘレニズムの中心地たる  
アレキサンドリヤを説くこと詳なり。第五章に入りては轉じて新  
興の羅馬に及ぼしたる影響を論じ、第六章には基督教の發展に對  
する希臘文明の寄與の甚大なるを説き、次で第七、第八兩章に於  
て中世以後現代に至る該潮流の消長を「近代文化と古典」なる題下に  
要約し、ピサンツと同教、學藝復興人生派、啓蒙運動古典派、ロ  
ーマンチック運動に亘りて希臘文明の勢力を説き、最後に該文明